涼宮ハルヒの消失について

ヤマダヒフミ

こういう作品が現れると、ライトノベルとか純文学とかいったジャンル分けが馬鹿らしくなる。この作品は素晴らしい。それは言ってみれば、村上春樹の「羊をめぐる冒険」のような素晴らしさだ。

この作品の良さを自分なりに解説してみよう。この作の主人公キョンは普通の高校生である。そしてこの普通の高校生はひょんなことから、ハルヒ、そしてSOS団といった非日常的な連中に取り囲まれ、ヘンテコな学園生活を送り出す。ハルヒは日常を嫌い妙な事に手を出し、ハルヒの結成したSOS団のメンバーは実は超能力者や未来人といった、非日常的存在である。そしてこの主人公はやはり村上春樹の主人公ばりに「やれやれ」と言いつつ、彼らとの生活を半ばは楽しみ、また半ばは元の平穏な日常生活に戻りたいと望みながら、そうした学園生活を送っている。だがある日突然、何の拍子かわからないが、このヘンテコな連中ーーーハルヒやSOS団が消えてしまう。そして彼は元の、半ば望んでいた平凡な学園生活に復帰するのだが、そこで彼は自問する。「これが本当に俺の望んていた生活だろうか？」と。

私は過大評価しているかもしれないが、それでもいい。この重要な場面ーーー日常と非日常の分かれ道の選択の場面において私が思い起こすのは夏目漱石の「それから」だ。「それから」では、主人公は、不倫という間違った道を選びつつも、「何故もっと早くその道を選ばなかったのだろう？」と自分に問いかける。こんな事を取り上げて、私が言いたい事は次のような事だ。結局、人は社会的に良しとされた、常識的で道徳的で温和で、小市民的な人生よりも、もしかしたらそれから外れるかもしれないが、自分にとって納得できる道を選ぶ、選ぶべきではないか？・・・と言うことである。そして、言うまでもなく、この作品の主人公キョンにとっては、その選択は、ハルヒーーSOS団を選ぶか、それとも今、何の理由か分からないが戻ってきた平穏な学園生活を選ぶか？・・・という二つの選択にかかっている。そしてキョンは前者を選んだ。

つまり、私が言いたいのは、この作品で展開されているテーマは、作者が無意識的にしろ、村上春樹と似たような本質的な文学的課題ーーーというより、人としてどういう風に生きるべきか？という問題に踏み込んでいるという事だ。私達はこの作品をエンターテインメントとして読むのが当然だし、またそう読んでいる人も沢山いる事は知っている。それはそれでいい。だが、この作品は、私達の選択ーーー私達にとって、それが社会の常識から外れようとも、自分自身に納得できる道を選ぶべきか？・・・それとも、この作の主人公が自問するように平穏無事な、それこそ「リア充」的な生活を望むかどうか？・・・という重要な問題を扱っているのだ。そしてキョンは、ハルヒとSOS団という非日常的生活を選択した。つまり、本作でこの主人公は初めて常識から一歩歩み出て、自分の道を進んだのだ。